

— 徳取県中部農村地区について —

鳥取女子短大 ○ 陶山孝子 小林真美

〔目的〕近年農村における栄養改善の成果は見るべきものがあるが、細部に亘ってみれば地域、年代によって何らかの問題点を包含していると思われる。我々は農村家庭の主婦の食生活に対する意識と実態を知ることによって今後の県内農村地域の食生活のあり方について有意義な示唆を得られるのではないかと考え本調査を実施した。〔方法〕本県農業の中心地域である中部地区において異なった性格をもつ東郷町、関金町、大栄町を選び主婦を対象に質問紙を配布、留置数日後に回収した。有効回収率は84～99%であった。

〔結果〕Ⅰ生活環境 職業は兼業も含め農業61%、住居環境は農業地区が79%を占めている。家族構成は農業世帯の拡大家族が高率である。主婦の職業は農業が50%、ついで会社現業22～28%、家事専従は14～16%である。Ⅱ食生活 朝食の欠食率は高校生から多くなり20才代でピークとなる。男性の欠食率が高い。昼食の外出も高校生から20才代に向ってピークとなり男性の外出率が高い。調理の担当者は朝夕共に主婦が20～30%を占め日常の献立はその日になってから考える者が45～55%である。約50%の家庭で野菜の全部または一部を自給している。食料品の購入はスーパーか/位で農協経営のスーパーを利用している。献立を考える基準は家族の嗜好、栄養が上位、経済季節能率は中位、主婦の嗜好は最下位で若町とも同傾向である。主菜として動物性たんぱく質食品を80%の家庭が毎日食べ/位は鮮魚、2位卵、3位豚肉で地域による差はない。野菜では淡色野菜の摂取度が高く、また主婦の牛乳摂取量の少なさも指摘される。農村では町保健課、農協婦人部等を頂点として下部組織の充実が地域の栄養指導に大きな役割を果たしていることを痛感した。